

CALL 環境を利用した  
「ボキャブラリー・ビルディング」の授業

吉田 由美子

Observations on “Vocabulary Building”  
in a CALL Environment

YOSHIDA Yumiko

Abstract

The purpose of this paper is to show some observations on "Vocabulary Building" focused on the students' motivation in a CALL environment. Recently, it is said that both teachers and students have become computer literate and use computers to do meaningful and productive work in language teaching or language learning. It is true that e-mails and browsing the Website have become quite usual in our daily lives these days; however, it seems that they haven't made the most use of computers in class so far. Using computers in language learning tends to make students passive. They should be active learners in this situation. The computers and language laboratories must be used just as tools to accomplish active learners' purposes. The aim of some meaningful approaches used in "Vocabulary Building" class is to allow students to be interactive in learning vocabularies.

## 1. 研究目的

昨年度、初めて「ボキャブラリー・ビルディング」の授業を担当することになり、どのような授業展開をしていくかということで、授業案について深く考えることとなった。前期は、普通教室で授業を行い、教材に即していろいろなアクティビティを行った結果、学習者側からは「ある程度の語彙力を身に付けることができた」、という回答を得られた。後期に実験的に数回コンピュータ教室を利用して授業を行ったところ、「授業に意欲的に取り組める」という反応があり、この結果を得て、今年度はコンピュータ教室での「ボキャブラリー・ビルディング」という授業案にそって、授業を展開している。

以前からコンピュータを利用して授業を展開する多くの研究発表や実践報告を聞きながら、その最大の疑問となったのは、「コンピュータを利用することで、Teacher's Role は、どのように位置づけられるのか」、ということであった。研究会等での意見交換をきいても、コンピュータに関する知識のある教員が担当すれば、英語担当の教員でなくとも、授業を進めることができるのではないか、との思いが強まった。事実、いくつかの研究発表のあとで、この疑問を‘悩み’として抱えているという発表者からの意見を幾度となく聴くことになり、「授業として行うのではなく、学生自身が自習でコンピュータを使えるようになるための準備のための授業であるような気がする」という意見に納得したこともある。

ある CALL システム開発の担当者に、システムを導入した大学では実際にどのように活用されているのかと、授業の具体的な実践例を教えていただきたい、とお願いしたところ、一つのシステムを導入した大学の例として、「‘学生主体で’、ということで、授業としてではなく自習的な要素として使われているようだ。」という答えであった。もちろん、コンピュータを利用しながらも授業を双方向で展開している実践例もあるが、多くはハードのサポートスタッフなしでは、教員側の負担がかなり大きく、限られた状況でコンピュータを利用することは困難である。

しかし、このような情報化社会と言われる時代において、ある程度環境が整

っていれば、言語学習において学習者の動機づけ、ひいては学習者の自発的な学習姿勢へのきっかけとなる授業ができるのではないだろうか。コンピュータ中心に授業を展開するのではなく、あくまでもコンピュータを‘ツール’としてとらえて授業を進めていくことはできないだろうか、という視点にたつて、実験的に「ボキャブラリー・ビルディング」の授業をコンピュータとLLの環境のなかで展開する試みを行った。

語彙指導に関しては、reading の中で行われることが一般的であると考えられている。また、それとは別の様々な指導法が提案されているが、確立されたものがなく、語彙指導自体があまり重要課題とみなされてこなかったという指摘(Nunan:1991)もなされている。

しかし、高校生が自分の英語のスキルを自己評価したものの結果<sup>1</sup>によると、自分が劣っていると思っているのは、高校生314人中209人が単語力と回答し、力をつけたいと思っているものが単語力である、という回答も172人という高い数字を出している。今年度の「ボキャブラリー・ビルディング」のクラスで同ジャンケートを実施したところ<sup>2</sup>、図1が示すように単語力が劣っていると考える学習者が多いことを裏付ける結果となった。

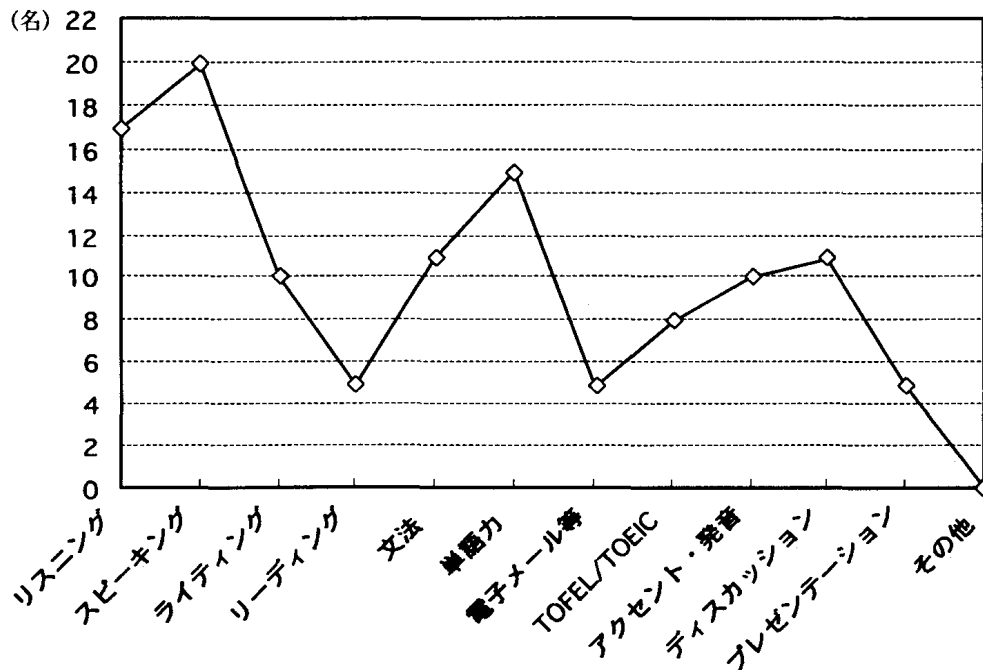


図1 学習者が劣っていると感じている分野

このように学習者が劣っていると感じている単語力を、効果的に身に付ける学習方法に、自習的な要素から脱することはできないだろうか。学習者が意欲的に取り組める授業を展開させるために CALL の環境が、何らかの役割を果たせるのではないだろうか、そういった思いでこの授業計画を始めることにした。

## 2. 「ボキャブラリー・ビルディング」の授業形態の傾向

「ボキャブラリー・ビルディング」という科目を設けている日本国内の短大、大学の中で、いくつかの短大、大学の講義内容を Web 上で読むと、授業形態として以下のような主な5つの傾向がみられた。

1. 語源の説明をもとに語を分解し、語の構成を学ぶ
2. 様々な日本語の文を英訳する(口語やカタログなども利用)
3. Dictation を行い、TOEIC, TOEFL の単語を練習
4. 速読を通して、語を推測する
5. 決められた範囲の単語を覚え、定期的に単語をテストする

昨年度の前期の授業では、上記の2.以外は、全く同じ形式ではないが、授業のなかに取り入れて行ってきたものである。授業中に行った活動で、意外にも学習者が一生懸命になって取り組んでいたのは、「5. 単語のテスト」であった。翌週までに覚えてくるように範囲を伝え、毎回授業の最初の10分間を利用してテストを行った。テストの材料に使っていたテキストは、文の中で単語を覚えるというものであり、一回の範囲は2ページに渡る。単語、発音記号、品詞、その単語を含んだ英文、和訳、という形式で構成されていた。大学生が、果たして音読をするだろうか、という不安もあったが、語彙は文字情報ではなく、音声として認識して欲しかったので、範囲とした箇所は発音のポイントや説明を加えたあと、すべて発音し、それに続いて発音するように指導した。しかし実際に始めてみると、当初抱いていた不安に反して、学習者はこの発音練習に対して、躊躇するどころか、「発音がよくわからないので何度も発音して練習したい」、というほど発音練習に意欲的であった。「ボキャブラリー・ビル

ディング」に音声の練習を取り入れることは、必要な要素であると思われた。

また、国外の Vocabulary Building の授業の Lesson plan を Web 上でいくつか調べたなかの一つ (Palmberg:2000) で気がついたことは、ペアやグループによる活動であった。グループで新出単語を理解するために、ゲーム感覚で単語を確認しあい、その語を中心にして Brain storming、発表などが行われている例も多くみられた。

このような形式は「ボキャブラリー・ビルディング」のようなどちらかといえば、個別学習的な要素の授業の中で行うことができるだろうか、という思いもよぎったが、テキストの中のいくつかのタスクをグループで行うように取り入れてみると、非常に効率よくタスクをこなすことができ、クラスの雰囲気もまとめ、授業がスムーズに行えることとなった。

後期の授業では、月に1回のペースということで、合計4回の授業をコンピュータの教室を使用して行った。すぐに、授業を行えた理由のひとつには、コンピュータの初歩的な操作であれば可能であるという学生が多かったこと、コンピュータに特に詳しい学生が数名いたことによる(これは前期のうちに調査をした)。

実験的に行ったので、まずはインターネットを利用するということだけに絞った。4回の授業の中で行ったことは、1. Web 上で英英辞典を探し単語の意味を探す、単語のテストをする、2. 興味のある情報を検索、プリントアウトし、それについて概要をレポートする、3. resume の書き方のあるサイトを参考にして、自分で英語の履歴書を書いて提出、というものであった。

インターネットを利用していた学習者が非常に少なく、「検索エンジンの使い方が全くわからない」、「日本語以外の Web ページを閲覧したことがない」、ということで、第1回目の授業では、インターネットの基本的な説明をしてから実際に検索エンジンを使うということからスタートした。後期の授業の最後にはコンピュータを利用した感想について、「自分では知らなかったことが多く、もっとコンピュータを使いたかった」という意見が多く寄せられた。

### 3. 学習者のニーズと前期授業計画の視点

今年度の担当クラスの22名の学習者から得たコンピュータの利用状況は表1であるが、実際には質問の選択肢が携帯電話でも使用可能なものであるために、携帯電話をコンピュータとして認識していた可能性が高い。

表1 コンピュータの利用状況（複数回答）

email	ゲーム	情報検索	文書等のソフト利用	ネットサーフィン	その他
8	5	11	0	3	1

事実、授業を開始してみると、「ログオンの操作がわからない」、「キーボードが打てない」という学習者がほとんどで、タイピングソフトの「TypeQuick」をせめて Lesson 4 まではおわらせておくこと、できるだけ早いうちにコンピュータになれておくこと、という指示とともに、第一回の授業は、コンピュータの初歩的な操作の説明と、注意事項でおわってしまう結果となった。そのような心許ない状況で授業をはじめることにはなったが、「10. コンピュータを使った語学の授業があつたら、受講しますか？」の問い<sup>2</sup>には、「はい 22名、いいえ 1名、どちらとも言えない 1名」という回答を得、操作に不安を感じながらも、積極的に取り組もうという気持ちを、窺い知ることができた。

4月の授業の最初に行ったアンケート<sup>2</sup>の結果をふまえ、かつ「ポキャブラリー・ビルディング」の国内外の授業の傾向と昨年度の授業の学習者の反応等をもとにして、今年度の授業をどのように進めていくかという6つの留意点を以下に掲げる。

1. コンピュータをツールとして使用する
2. 自習的な授業ではなく、インタラクティブな活動を行う
3. 音声練習を取り入れる
4. ヘッドセットは、使用する時間を区切り、長時間の使用を避ける
5. 年間を通じて、個人のワードリストを作成する

#### 6. 毎回、学習者の自己評価と授業への意見を回収する

これらの留意点は、コンピュータの操作に苦痛を感じたりすることのないように、操作に慣れていない段階では、コンピュータ以外のもので代用できるところはそれで行ってもかまわないということ、また、ペアワークや語彙の発音練習などに LL の機能を使用すること、教員側は学習者とのコミュニケーションを常にとりながら、学習状況へのフィードバックを徹底させることとした。また、高校までの英語学習の様子から判断すると、語彙をつけるために「英語を書く」ということに慣れていないが、自分だけのワードリストをコンピュータを使って作成することを年間目標のひとつに掲げた。

ワードリストについては、語彙選定の点で様々な意見(安藤編:1991)(小川編:1982)があるが、テキストを中心にして自分にとっての新出単語をすべて拾い出して作成するということにした。

#### 4. 授業の実践

大学一年生には少々難易度が高いと思われるテキストではあるが、使用テキストとして、*Complete Guide to the TOEFL LISTENING*<sup>3</sup>を音声教材、*PRACTICE Vocabulary*<sup>4</sup>を「ボキャブラリー・ビルディング」の教材として、使用した。

授業の流れとして表 2 に概要を記したが、それについてもう少し詳しく説明を加える。

表2 前期授業の流れ

\*C:コンピュータ使用 LL:LL機能使用

	Text	Activities	Teacher's role	C/LL	Time (min)
①	Warm-up	コンピュータの起動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Evaluation Sheet の返却</li> <li>・ 前回の授業での質問に答え、関連表現等の説明</li> </ul>		10
②	TOEFL	録音・再生で選択問題に解答	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教材送り出し</li> <li>・ 個別に英語で質問</li> <li>・ 学習者からの質問に答える</li> </ul>	LL C	10
③	TOEFL	ペアワークによる答え合わせ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 解答の提示とイントネーション、発音上の注意等のアドバイス</li> </ul>	LL	10
④	PRACTICE	本文の音読と問題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コンソールを離れ、個別指導</li> </ul>	LL	10
		ペアワークによる答え合わせ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 解答の提示とイントネーション、発音上の注意等のアドバイス</li> </ul>	LL	10
		本文の音読 インターネット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個別にチェック</li> </ul>	C	15
⑤	TOEFL PRACTICE	ワードリストの作成 Word/Excel インターネット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コンピュータの操作および授業全般に対する質問に個別に応じる</li> </ul>	C	25
⑥		Evaluation Sheet の記入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Evaluation Sheet の回収</li> </ul>		5

### ①Warm-up

ここでは、まず毎回授業の最後に、日付、語彙の練習、音声の練習について5段階評価で自己評価し、さらに授業に関わることと限定せずに自由に授業の感想を書く欄を設けた Evaluation Sheet に教員側がコメントをつけて、返却する。この際、学習者全員に対して必要な情報や数名からの意見をとりあげて、コメントも加える。この間にほぼ全員がログオンをすませ、LLの準備も整う。

### ②TOEFL

このテキストでは、1章に10問の問題があり、1問には2文ずつ似通った文が記されている。学習者は音声で一文が読まれるのを聞き、2文のうちどちらが同じ意味を表すかを選ぶ。会話で使われる表現や、慣れていないとかなり速いスピードに感じられるため、細かい聞き取りが要求される。備え付けのレコーダーに録音したものを何度も聴いて解答することになるが、早くおわってしまった学習者は音声のディクテーション、テキストの文の読みの練習、およ



び和訳をする(この際、通常の辞書の使用や Web 上の辞書の使用可)。教員側はモニタを通して、英語で解答を尋ねていき、進行状況を把握する。授業開始当初に比べて、CALL ボタンを押す学習者が増え、積極的に質問をする姿勢がみうけられた。

### ③TOEFL

ここではランダムにペアを組み、学習者同士で答え合わせを行う。答えに一致がみられない場合は、ここで相手が納得するように説明をさせる。その後、テープで流された文のスク립トを教員のコンピュータ画面に提示し、学習者はモニタもしくはスクリーンで自分の解答を再確認する。ここで解答を口頭で伝える。時間がある場合は、ペアで和訳したことを口頭で英訳することも行う。ペアワークでは、ヘッドセットの使用がづらい場合もあるので、席が特別遠くに離れていない限り、ヘッドセットを使わずに行う。

### ④PRACTICE

このテキストは、300ワード前後の説明文のあとに、その説明文中の単語を学ぶための形式の違う問題が2つから3つ用意されている。

ここでは、辞書の使用は不可とし、発音のしにくい単語の説明などをしたあと、センテンスごとに音読をしていく。この間、教室内をまわり、学習者が発音やイントネーションにとまどっている場合には、指導する。音読練習のあと、本文中の新出単語10程度の意味に該当する英語の説明を選ぶ形式の問題があるが、辞書を使わずに推測ができたときには、かなりの達成感があるという意見が多数あった。ここでも解答は新たに組み直したペアで答え合わせをし、教員が最後に解答を提示する。

### ⑤TOEFL PRACTICE

授業のまとめとして、ワードリストの作成を行う。その日の授業に新しく学んだ語、あるいはイディオムなどを、まず文書ソフトの Microsoft Word にフ

フォーマットにこだわらずに打ち込んでいく。語の場合は、必ず品詞と例文を入力し、意味はあらゆる辞書を利用してかまわないことにする。

学習者の一例:

May 22, 2002	
Novel	n. 小説 I have read a detective novel.
Appeal	v. に一することを懇願する、を求める I appeal to you to contribute to the new clinic.
Object	n. 物体、対象、目標 v. に反対する、 She saw a unusual object.
Profit	n. 利益、得 v. 利益を得る He made a profit of 20,00 yen on the sale.

このように入力した語はすべて、コンピュータの操作に慣れてきた段階で、学習者は各文に和訳をつけて‘Excel’に変換していく。このリストはおそらく膨大な量になっていく可能性があるので、後期にはデータベースソフト‘Access’へと変換し、データベースとして保存する予定である。

授業の最後にはログオフ後、Evaluation Sheet に評価や意見を記入し提出する。

##### 5. 前期授業終了後の学習者の意見

前期試験の際、後期の授業への反省材料とするために、授業の感想のアンケートをとった。問題用紙の裏に印刷したためアンケートに気がつかなかった学習者があり、有効回答数は20である。

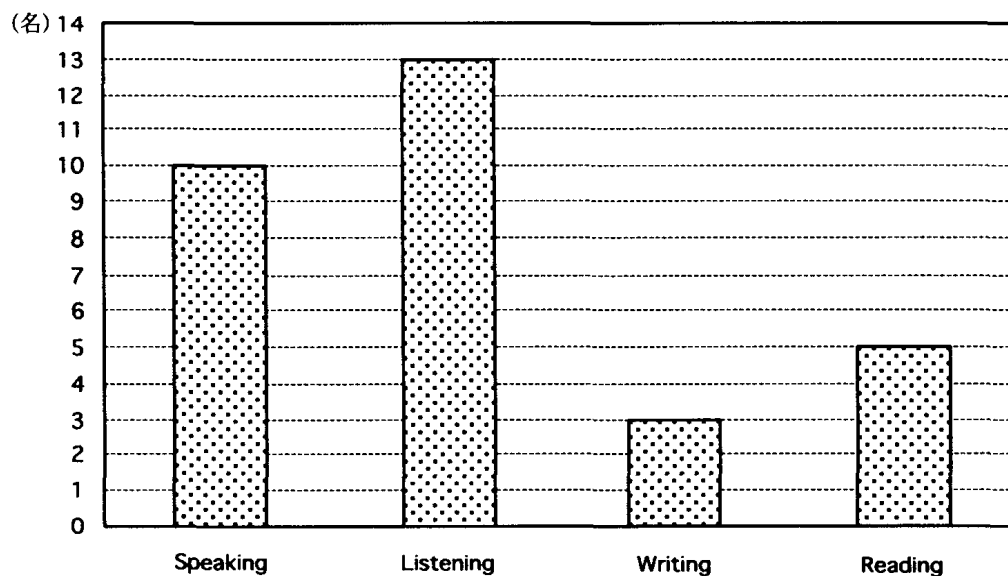


図2 学習者がすべての授業を通して重点をおいている Skill

学習者が現在受けている授業全体をみて、自分が重点的に身に付けたいと思っているスキルは、上記のようにオーラル・コミュニケーションに関わるものであり、「話す、聴く」という活動には積極的になれると思われる。しかし、前期の授業を受けた結果として、自分で実力がついたという効果を実感することが出来たと思えるスキルとなると(図3)、「聴く、読む」といった、受け身的あるいは、自分から発信するという productive な活動には、効果を感じられなかったという結果が読みとれる。

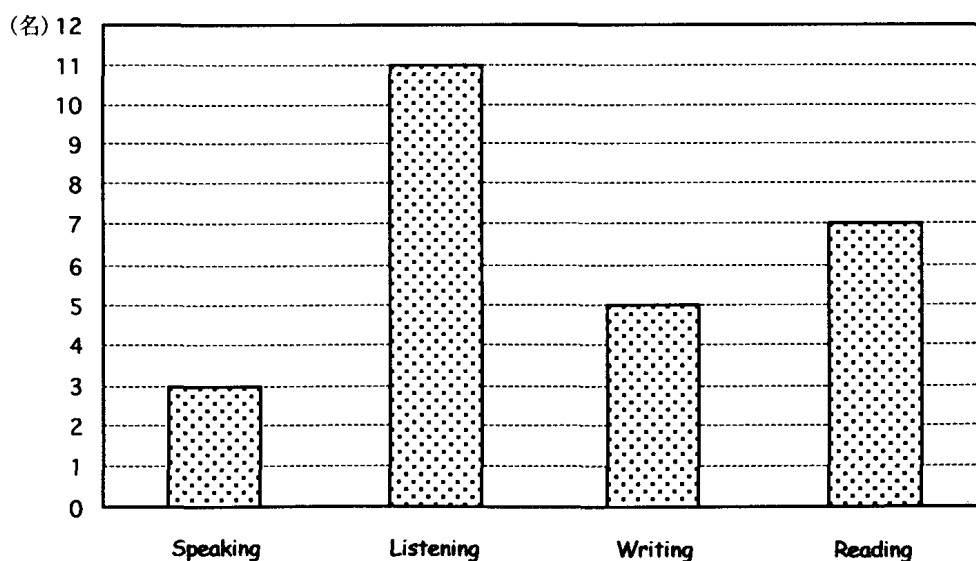


図3 自分で効果が上がったと思う Skill

しかし、この結果から何らかの形で自信を得たということがわかる。

アンケートの中で、“自分が重点的に行おうと思ったスキルにこの「ボキャブラリー・ビルディング」の授業が役にたったか”、という問いには、「はい：16名いいえ：1名どちらともいえない：3名」という回答があり、授業開始時にコンピュータの操作が困難な学生が目立ったことから、負担になっているかどうかを調べるために、“開始時にくらべ、コンピュータの操作が楽になったか”、という問いには、「はい：16名どちらともいえない：4名」という回答となった。また、図4にみられるように、授業中の活動として取り入れたものに対して、受容出来るという結果が出た。ペアワークの数字は3であったのにもかかわらず、感想として自由記述されたもののなかでは、「ヘッドセットを通してのペアワークや教員への質問が、躊躇なくできるということで話すことに自信がついてきた」、「ワードリストを作成することは初めてなので、自分で楽しいと思いながら単語を覚えられるようになった」という意見が圧倒的に多かった。

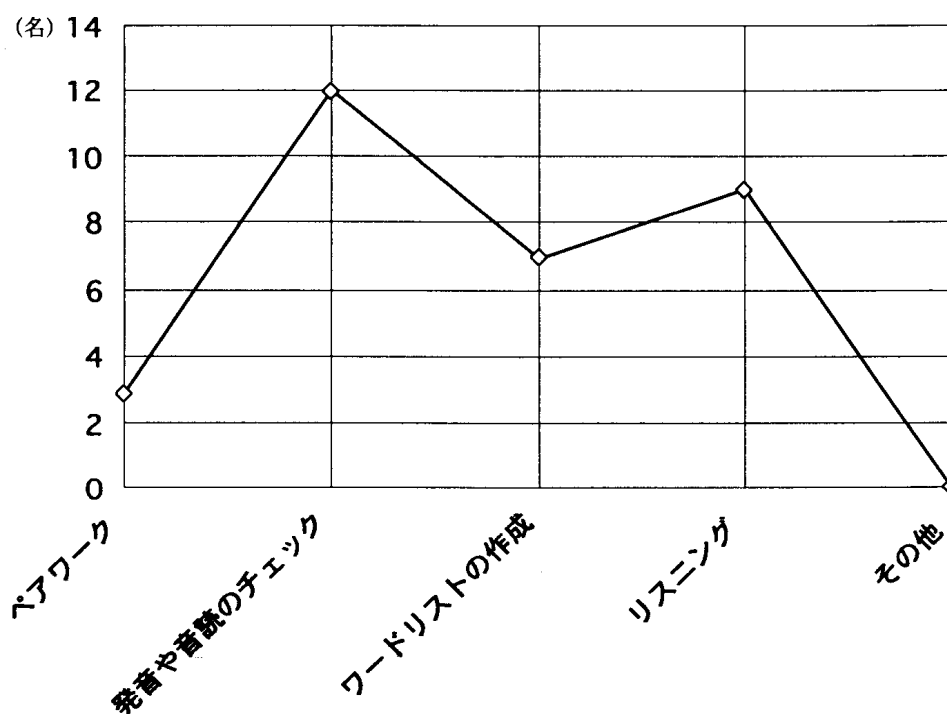


図4 授業で積極的に取り組めた活動

## 6. 後期の授業への課題

今回の前期の授業では、毎回コンピュータ室の利用ということにしたものの、学習者がまだ操作に慣れていないことを事前に把握していなかった点などから、当初はこのまま予定通りに進められるかどうか、という不安もあった。

しかし、学習者がペアワークに慣れてくると、クラス全体がまとまりはじめ、お互いに協力しあって、授業が進められた。

教員側としては、準備にかなり時間を要することと、使用教室がコンピュータと LL が連動している CALL システムの環境ではないことから、機器の切り替えに手間取ることがあり、その時間をどのように使うかという問題点もあったが、指定されたタスクが早くおわってしまった学習者は率先して、ワードリストの作成に取り組み始め、時間が無駄になるということは解消された。このような不十分な環境においても、学習者がコンピュータを操作することへの抵抗感をなくし、インタラクティブな活動に興味を持ち、積極的に授業に参加する意欲的な態度で授業にのぞむことができるという予想以上の反応に対し、教員側としても学習者のニーズに応えるべく、さらなる授業の展開を探求していきたい。

また、学習者は昨年度の経験からもすでに明らかになっていたように、音声の学習に非常に意欲的であることから、この学習を継続する一方で、単語と意味の関連づけを徹底させる必要がある。テキストを有効に使用した指導法 (Carter, Goddard, Reah, Sanger, Bowdng:1997)などを参考として、今後は、語彙の定着度をはかる基準をどのように設定するかという最重要課題に取り組むことを中心として、授業を展開していきたい。

## 7. コンピュータ利用の授業の問題点と今後の課題

現在、CALL システムを導入している、あるいは情報科学室を利用してコンピュータを使用しながらの語学学習を行っている大学で、いくつかの問題点が指摘されている。自習的な要素があるということについては大きな問題点としてとらえる必要がない、という考え方があるため、その意見については別の

機会に述べるとする。それ以外の問題点として、限られた科目でしかコンピュータ利用ができないという報告がなされている。田畑<sup>5</sup>によれば、「Web 上での情報収集」「Web 上で記事を読む」「ホームページの作成」は、授業として適しているが、「メールのやりとり」等は、自習向きであるとしている。

また、CALL 教室が音声コミュニケーションの授業に適さないとし、その理由として、(1)机が固定式のためコミュニケーションに適さない、(2)モニタが邪魔になり、教師や学生の顔がみえない、(3)ヘッドフォンとマイクを使うため、大きな声をださない、(4)アクセスが集中するとオンライン学習サイトが使えない、という点を指摘している。

しかし、今回の「ボキャブラリー・ビルディング」の授業で行っていた活動のように、90分間をコンピュータ使用に費やすというのではなく、様々なアクティビティを取り入れるという授業案を作成すれば、限られた科目だけでしかCALL教室を利用できない、ということにはならない。

アクティビティのやり方によって、音声コミュニケーションの授業に適さない理由の(1)と(2)は即座に解決することができる。また理由の(3)は、英語を話すことに抵抗のある学生にとっては、このようなやり方によって「話す」ということに対する不安をとりのぞくことができる、という利点もある。

またソフトの問題点として、「CALL 教材には目的に応じた教材がない」「ソフトが高額過ぎる」という声は以前から聞かれ、開発が進んでいるようではあるが、まだ利用する教員の要望を満たしていない。多くの大学ではコンピュータ中心に授業を展開する以上、多くのブースを導入し、クラスサイズも必然的に大きくなるということから、効率のよいソフトの開発を望んでいると思われる。

しかし、学習者がコンピュータの基本操作を必修としていない場合、クラスサイズが大きくなればなるほど、教員の負担は多くなり、授業をスムーズに進めていくことは難しい。

効率のよい授業を展開するには、(1)クラスサイズは20人前後、コンピュータの安定性は極めて不安定なものなので、(2)ハードやソフトのトラブルに対

応できるスタッフのサポート、この二つの条件が整えば、いかなる授業もインタラクティブな授業になる可能性があると考え、今後はまた別の授業でのコンピュータ利用の授業案を提案していきたいと考えている。

#### 註

1. 菅宮恵子、鈴木 栄、吉田由美子「教員と生徒にとって身近なコンピュータを使った英語の授業—アンケート調査による教員と生徒の needs analysis を基にした提案—」

外国語教育メディア学会 (LET) 第42回2002年度全国研究大会

於:大妻女子大学の口頭発表に使用した高校生へのアンケート結果による

2. 1. で使用したアンケートと同じものをこのクラスの4月の授業で実施
3. NEWBURYHOUSE/HEILE & HEINLE/SHOHAKUSHA 1995
4. THOMSON LEARNING 2002
5. 田畑義之 CALL 教室と初習外国語教育—可能性と問題点—  
<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/%7Ecall/symposium/MARK063.GIF>

#### 参考文献

Carter, R, Goddard, A., Reah, D., Sanger, K. and Bownng, M. 1997. *Working with Texts: A core book for language analysis*, London: Routledge

Nunan, D. 1991. *LANGUAGE TEACHING METHODOLOGY: A textbook for teachers*, Hemel Hempstead: Prentice Hall.

Palmberg, R. 2000. *The Internet TESL Journal*, Vol. VI, No. 5, May 2000

<http://iteslj.org/> <http://iteslj.org/Lessons/Palmberg-Runner.html>

安藤昭一(編)1991. 『英語教育現代キーワード事典』 増進堂 pp. 231-233

小川芳男(編)1982. 『英語教授法辞典 新版』 三省堂 pp. 692-697

## APPENDIX

### 前期授業についてのアンケート

この授業以外の授業について該当個所に○をつけてください。

1. 現在受けている英語の授業の種類の数はいくつですか？

1. Speaking 2. Listening 3. Writing 4. Reading

5. その他( )

2. 今、重点をおいている英語の skill は？

1. Speaking 2. Listening 3. Writing 4. Reading

5. その他( )

3. 自分で効果が上がったと思われる skill は？

1. Speaking 2. Listening 3. Writing 4. Reading

5. その他( )

ここからはこの授業について教えてください。

4. 2の答えにこの授業は役立ちましたか？

1. いいえ 2. はい 3. どちらともいえない

5. コンピュータを英語の授業で使うことに抵抗がありますか？

1. いいえ 2. はい 3. どちらともいえない

6. この授業の中で積極的に取り組めたことはどんなことですか。

①LLを使ったペアワーク ②LLを使った発音や音読のチェック

③ワードリストの作成 ④リスニングの練習問題 ⑤その他

7. 授業前と前期授業終了後では、コンピュータが少し楽になりましたか？

1. いいえ 2. はい 3. どちらともいえない

8. この授業を通して、英語に関して自信がついたことがあれば書いてください。

前期の授業に対する意見、または後期の授業への要望等、何でもかまいませんので、ご意見をお書きください。